Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies

SUS LOTTO 11

Contents

【プログラムコーディネーターからのメッセージ】 □ユット長からのメッセージ ■GSS教員からのメッセージ ■GSS特定教員の紹介 ■2015年度入学式 ■博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2015 ■GSS履修生の紹介 ■GSS 金沢市・能登半島における合同合宿型ホームルーム(平成27年度) |編集後記



プログラムコーディネーター からのメッセージ

寶 馨 防災研究所



グローバル生存学大学院連携プログラムは、京都大学の9つの大学院研究科と3つの研究所が連携し、安全安心分野の新たな学際領域である「グローバル生存学 (GSS = Global Survivability Studies)」を開拓することを目指す5年一貫制の博士課程教育プログラムです。この大学院連携プログラムでは、安全安心分野において、専門的実力、人間的魅力、社会的俯瞰力を備えた国際的リーダーたるべき人材を育成することを目指しています。

夏前の厳しい予科のプロセスを経て、新たに23名の優秀な学生がGSSプログラムに入学しました。その内訳は、L1が20名、3年次編入のL3が3名です。フレッシュなメンバーを加えて、講義や各種活動が益々活発化してきました。GSSの在籍学生は、年齢層も多様ですから、学年の枠を気にせず、また、研究科・専攻の枠を超えて、学生諸君が大いに交流を深め広げて、厳しくも楽しいプログラム履修を続けてくれることを願っています。

GSS特定教員の紹介について

GSS 特定教員として清水美香氏が 2015 年8月に着任しました。 清水氏は 10年以上にわたり海外の政府機関、民間企業、シンクタンクなど様々な機関に在籍しながらグローバルリスクガバナンスを研究してきました。「GSS 特定教員の紹介」では清水氏がこれまでの活躍や今後の GSS での教育活動に向けた抱負を語っています。

博士課程教育リーディングプログラムフォーラム2015について

2015年6月18日に百周年時計台記念館国際交流ホールにて「京都大学博士課程教育リーディングプログラム合同ワークショップ 2015」が開催されました。京都大学では5つの博士課程教育リーディングプログラムが実施されていますが、このワークショップでは各プログラムに参加する学生や教職員が各プログラムで取り組んでいる研究や活動の紹介を行いました。詳細は「リーディングプログラム合同ワークショップ 2015」をご参照ください。

ユニット長からの メッセージ

塩谷雅人 生存圈研究所



GSS プログラムでは、様々な研究科の教員が連携して安全安心分野において国際的なリーダーとなる人材の育成に向けた幅広い活動を行なっています。なかでも医学研究科社会健康医学系専攻では、GSS プログラムへの参加を通して健康や医療の観点からグローバル生存学の教育を行い、国際化と学際化を進めています。「教員からのメッセージ」では医学研究科の木原教授から「プラネタリーヘルスと GSS プログラム」という題目で寄稿をいただきました。人間の健康を「人間文明」と「自然システム」との相互的因果プロセスの中で捉えようという考え方についての興味深い内容の記事です、ぜひご覧下さい。

GSS プログラムでは、学生間および学生と教員間の交流を図るため定期的に合宿型のホームルームを開催しています。今年度は2015年9月25日から28日にかけて、石川県金沢市および能登半島においてL1~L4年生合同のホームルームが行われました。詳細は「GSS 金沢市・能登半島における合同合宿型ホームルーム」をご参照ください。

このニュースレターでは GSS プログラム本科生の学生の皆さんの紹介を行っていますが、今回は 7名の学生さんを紹介します。 GSS 履修生の多くは、様々なフィールドで安全・安心に関わる調査・研究を行っています。 異なる研究科に所属し、分析アプローチは様々ですが、フィールドに対する熱い思いは共通するところがあります。 各研究科で学ぶ専門知識と GSS プログラムで学ぶ学際的知識によって、社会のリーダーとなるべき人材が着実に育っていることを実感できます。

GSS プログラムの活動内容など最新情報はウェブサイトに掲載されています。最近このウェブサイトを刷新しましたのでぜひご覧下さい。URL は以下の通りです。

http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/

何かお気づきの点がありましたら、遠慮なく事務局までお知らせ 下さい。

GSS教員からの メッセージ

木原正博 医学研究科



プラネタリーヘルスとGSSプログラム

最近、医学分野では、ここ数年の間に「プラネタリーヘルス planetary health」という概念が生まれ、最も著名な医学誌の1 つであるランセット誌は、今年7月にロックフェラー財団の資金 援助を受けて、「Rockefeller Foundation-Lancet Commission on Planetary Health」の最終報告書を発表しました。「プラネタリー ヘルス」とは、人間の健康を「人間文明」と「自然システム」との 相互的因果プロセスのアウトカムとして統合的に捉えようという概 念で、当然の考え方とも言えますが、これほど包括的にヘルスが定 義されたのは医学の歴史上初めてのことです。第二次世界大戦後に international health という概念が生まれ、21世紀初頭には global health という概念がそれにとって代わり、それからわずか 10 年ほ どで、こうした新たな概念が登場したことには驚きを禁じ得ません が、これは、それほど急速に、地球規模での環境破壊、人口増加、 政治的混乱などが進んでいることの反映と思われます(例えば、最 近のエボラ出血熱の大流行も、森林破壊・砂漠化→人・動物の生存 圏の縮小・密集化→人畜感染・人間集団での流行というシナリオが 想定されています)。こうした問題の解決には、地域レベル・地球 レベルでの「人類の協調」による「人間システムの健全化」が必要 ですが、それをもう後回しにはできないほど、人間文明は、その岐 路にさしかかっていると報告書は主張しています。

この報告書を見て痛感するのは、GSS プログラムの概念との相 似性です。GSS をヘルスの観点からみれば、正に「プラネタリー ヘルス」と一致するといっても過言ではなく、GSS プログラムとは、 人間文明と自然システムとの相互的因果プロセスという枠組みの中 に、ヘルスを含む様々な社会・自然的アウトカムを位置づけ、その 解決策を模索する真に21世紀的試みの1つであると言えると思い きす。

こうした GSS プログラムに、医学、特に社会健康医学系専攻が 参加したことで、専攻の「文化」に明らかな変化(グローバルな 雰囲気と活気)が生まれてきました。現在、GSSプログラムには、 医学・社会健康医学系専攻から 12名の学生(L1:5名、L2:3名、 L3:2名、L4:2名) が参加していますが、これらの学生は、プ ログラムで得られる機会を最大限に活用して内外で活発な活動を展 開しており、昨年度の GSS 国際アドバイザー会議の成功には、こ れらの学生のリーダーシップが大きな役割を果たしました。こうし



Safeguarding human health in the Anthropocene

epoch: report of The Rockefeller Foundation-

Lancet Commission on planetary health







Safeguarding human health in the Anthropocene epoch report of The Rockefeller Foundation-Lancet Commissio planetary health

sidition energy.

The Lancet Commission

た GSS 学生の活動は、周囲の大学院生にも明らかに影響を与えて おり、GSS以外の学生の中にも、海外での研修や学会に積極的に 参加する学生が増えつつあります。例えば、社会健康医学系専攻は、 2015 年度からスーパーグローバル大学創成支援事業に参加し、教 育・学位プログラムの国際化を促進するために、海外の大学と活発 な交流プロジェクトを展開していますが、海外派遣や招聘した海外 学生に対するバディプログラムに当初の予想を大きく超える多くの 学生が応募するなど、国際交流への積極性が高まっています。さら に、もう1つ特筆すべき GSS の影響は、京都大学学際融合教育研 究推進センター・グローバルヘルス学際融合ユニット (GHIU) が そのスピンオフとして誕生したことです。このユニットは、GSS 参加教員と学生が中心となって、医学、公衆衛生学、社会学、文化 人類学、地域学、環境学、衛生学、農学など多様な専門分野のメン バーで構成されており、全学授業(「グローバルヘルス通論」、「公 衆衛生と社会起業」、「ヘルスプロモーションにおけるゲームの利 用」)の提供、定期的セミナーの開催、高大連携プログラムの実施、 研究費申請など、その活動を拡大しつつあります。この中の授業は、 GSS 学生が中心になって企画されているものです。

このように、GSS プログラムは、社会健康医学系専攻の中に大き な影響を与え、その国際化と学際化を強く牽引しつつあります。恐 らく、他の研究科でも同じような傾向が生じているのではないでしょ うか。博士課程教育リーディングプログラムの後継として、「知の プロフェッショナルの育成」、「卓越大学院」というキーワードが文 部科学省から提示され始めたようですが、博士課程教育リーディン グプログラムのこうした優れた利点が失われないように大学レベル でのリーディング大学院の定着を早急に進め、次世代の新しいプロ ジェウトへの受け皿となる体制の整備が急がれるべきと思います。

GSS 特定教員の紹介

清水美香 GSS特定准教授



本年8月より、京都大学防災研究所から移り GSS の教員を務めさせていただいております。私は10年以上にわたり学生時代から米国を拠点にして、グローバルリスク、ガバナンスを中心とした研究に携わってきました。アメリカン大学で国際

政策修士号、大阪大学で国際公共政策・博士号を取得、それと並行して在米日本大使館と野村総合研究所アメリカで研究職、その後 East-West Center で政策研究に従事しました。 実際の現場に身を置いてはじめてわかることがあるという信念の下、政府機関、民間企業、シンクタンクに在籍し、俯瞰的な視点から社会課題の問題解決方法を追及するため研究と実践活動の両方を進めてきました。

特に民間企業では、日米間を何度も往復し日米の官民ネットワークと緊密にしながら委託研究を行いました。またシンクタンクでは、共同責任者として大型国際共同プロジェクトを実施する機会が与えられ、国際的な研究ネットワークと密接に連携をとりながら研究企画から実施に至るまで大変貴重な経験をしました。こうした経験を、特に国際共同研究や産学連携分野に活かし GSS プログラムに貢献できればと思っています。

なお 2015 年 3 月に『協働知創造のレジリエンス〜隙間をデザイン〜』(京都大学学術出版会)を初出版しました。同本は、できる限り俯瞰的なアプローチを取るため「学術」や「研究」という「壁」をギリギリまで取りはらい、様々な「境界線」に挑んだ本でもあります。今後も「木を見て森も見る」(俯瞰的)研究を通して、変容する現代リスク社会の問題解決のための仕組み創りに尽力していきたいと思います。

2015 年度入学式

フローランス・ラウルナ GSS 特定助教

2 015年10月1日、GSSプログラム2015年度の入学式が東一条館思修館ホールにて行われました。今年は1年生20名と3年次編入生3名が見事予科コースに合格し、正式にGSSプログラムに入学しました。

GSS ユニット長の塩谷雅人教授(生存圏研究所)が式を執り行い、GSS プログラムコーディネータの寶馨教授(防災研究所)をはじめ、GSS 幹事会メンバーの木原正博教授(医学研究科)、余田成男教授(理学研究科)、重田眞義教授(A.A 地域研究研究科)、および GSS 特定教員が列席しました。

寶教授は新しく入学した GSS 学生らに歓迎の辞を述べ、 出席した 19 名の新入生の名前を一人ずつ呼びました。最後 に、2015 年度生を代表して地球環境学舎修士課程の吉永由 美佳さんが誓いの言葉を述べました。

式後、GSS 特定教員の近藤久美子准教授が GSS フォリオシステムに関する短いオリエンテーションを行いました。学生らは今後そのシステムを通して進捗状況を確認し、GSS プログラムでの活動の証をアップロードしていくことになります。



プログラムコーディネーター寶教授による挨拶



入学者代表宣誓



博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2015

伊藤伸幸 特定助教

10 月24日と25日に東京大学の主催で博士課程教育リーディングプログラムフォーラムが開催されました。 フォーラムでは、オープニングセッションとプログラムワークショップ、学生フォーラム、パネルディスカッションが開かれ、リーディングプログラム間だけでなく産業界や公的機関との交流も図られました。

GSS 履修者からは、木村直子さん(地球環境学堂)、田中智大さん(工学研究科)、許冲さん(農学研究科)、ルケレ・ウェリントン・ベクムサさん(医学研究科)が学生フォーラムに参加し、「グローバル化や国際化」、「実社会課題に基づくプロジェクトワーク」、「異分野横断や交流」、「リーダーシップ教育」の課題テーマにそれぞれ分かれ、全国のリーディングプログラムから集まった履修生の皆さんと活発な議論を展開しました。

1日目の学生フォーラムでは、参加者はグループに分かれ、それぞれのプログラムで実施されている教育プログラムを紹介し、課題テーマに関する成果や課題を取り上げて議論しました。2日目には、課題テーマごとに選抜された3グループが集まり、履修生の視点からリーディングプログラムのこれまでの成果や将来に向けた課題について議論した結果について発表を行いました。

私は「リーダーシップ教育」のセッションに参加していましたが、履修生らがプログラムの履修を通じて、リーダーシップとは何か、





学生フォーラムの様子 プログラムコーディネーター音教授による報告

主体的な活動における失敗から学んだことをどう活かすべきか、個々の 特徴や強みをどう見える化すべきかなどといった点について履修生が熱 心に議論していたのがとても印象的でした。

このような履修生からのフィードバックも積極的に活かし、リーディングプログラムがさらに成長していくことを期待したいと思います。

GSS履修生の紹介

学研究科修士2回、GSS院生L2の塩谷太郎と申します。私は火山および地熱活動に関心があり、現在は九州の九重山という活火山を対象として電磁気的手法を用いた観測を行っております。本稿では主に現在の研究活動の様子をご紹介いたします。

九州の大分県と熊本県の県境には久住山、星生山などが連なっており、九重連山と呼称されています。星生山周辺では活発な噴気活動が見られ、その側には八丁原地熱発電所などのエネルギー関連施設も存在します。また同地域では1995年にその北側斜面で水蒸気爆発が起きております。これは先の御嶽山における活動と同様のものです。したがって九重火山の火山・地熱活動は自然科学、エネルギー、防災研究など多方面にとって重要です。このような活動にとって地下の水の存在や温度、圧力分布は非常に重要な要因となり、これらがどのように存在しているのか(地下構造)を把握することは非常に有意義なことです。私は自然現象に伴う電磁気的現象を利用して九重山の地下構造探査に取り組んでおります。観測は東京大学、九州大学、東京工業大学、京都大学が合同で行いました。現場では100kg 近い観測機材を持って移動します。今回は九重連山を中心とした約30km四方において約60の測定点を設置しました。各点から得られた抵抗値の違いは水やガス、岩石などの物体、その温度や圧力に依存するため、そこから実際に起きている現象モデルを考えることができます。これらの結果は火山災害の予知に効果的であり、GSSの理念にかなうものです。

理学研究科、グローバル生存学の2つを両立することによって、私は自分自身を磨く機会を たくさん得ることができました。今後もより一層の精進をしたいと考えております。 塩谷 太郎

理学研究科(L2)



Shiotani

ヒバ・アブエルガシム・ ファドエルモラ

医学研究科(L2)



ビデンスに基づく医療(Evidence-based medicine : EBM)の動きは、臨床試験の質の改善やハイテク情報システムの煽りを受けて1990年代初頭に爆発的に広がりました。EBMは「個人患者の治療に関する意思決定を行う上で現在最良のエビデンスを忠実に、明確に、賢明に使用すること」として定義されます。EBMから派生し、多くの他の用語や概念、たとえば「エビデンスに基づく実践」、「エビデンスに基づく政策)、「エビデンスに基づく政策)、「エビデンスに基づく政策)に「エビデンスに裏付けられた情報に基づく政策決定」などが展開されてきました。保険医療システムの「エビデンスに裏付けられた情報に基づく政策決定」(Evidence Informed Policy Making : EIPM)は、意思決定が最良の研究エビデンスに裏付けられていることを確実にすることを狙いとした政策決定アプローチです。GSSにおける私の国際共同プロジェクトはEIPMが実践されるように、スーダンの保険医療システムにおける政策決定者の意識とキャパシティを高めることにあります。

効率的で効果的な保険サービスを提供し且つ財政的および人的資源を最適化するために、公衆衛生専門家は EIPM に益々傾倒すると考えられます。しかし EIPM を実践する上で、多くの障壁やギャップが明らかになってきています。

私は EIPM の実践に向けた鍵となるステップは、政策決定者と研究者の両方のキャパシティビルディングであり、研究エビデンスは何かを共有し、政策決定の裏付に資する研究エビデンスの役割への理解が可能になることだと考えています。

はアジア・アフリカ地域研究研究科のアフリカ地域研究専攻に在籍し、ケニア共和国における社会福祉、とくに障害者のライフコースに着目して研究しています。私がフィールドとしているのは、多くの人々が牧畜を主な生業として生活している乾燥地域です。ここでは、人々が頻繁に移動する生活様式をとり、居住地が公的な医療施設から地理的に離れているために、近代医療サービスの供給を受けにくい状況にあることが指摘されています。このような環境下において、身体の機能損傷を抱える人々がどのような社会的困難をかかえており、それをどのように克服しているのかについて考えることは、安全安心な社会を実現するために必要不可欠だと考えています。

現在の研究テーマに関心をもったきっかけは、車椅子を使って生活する女性にフィールドで出会ったことです。彼女が暮らすここは半砂漠地域ですから、車椅子を使用することは決して簡単ではありません。「彼女の生活はどのような人々によって支えられているのだろうか」と疑問をもったことが、この研究の出発点でした。現在は、フィールドの人々と生活を共にしながら、参与観察やインタビューを通じて障害者の生活、とくに生計維持手段について調査しています。

私が研究するうえで大事にしているのは、フィールドでインプットしたものをしっかりアウトプットすること、つまり成果をフィールドに還すことです。目標としていることは、これまでの先行研究ではあまり描かれることのなかった、障害者のたくましい姿を民族誌として残すことです。

GSS にはさまざまな分野を専門にする学生が集まっています。プログラムを通じて彼らと知識を共有しながら、研究成果をアウトプットするためのコミュニケーションスキルや、研究者として必要とされる態度を身に付けるために日々努力しています。私は社会福祉の分野から、社会的困難が生み出されることのない安全で安心な社会の実現を目指して活動していきたいと考えています。

善積 実希

よしづみ みき

アジア・アフリカ 地域研究研究科(L2)

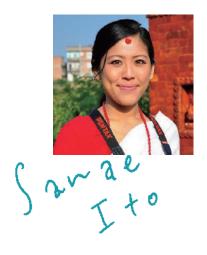


Milci Yoshizami

GSS履修生の紹介

伊東 さなえ

アジア・アフリカ 地域研究研究科(L2)



はアジア・アフリカ地域研究研究科(ASAFAS)にて、廃棄物問題を研究しています。世界中が大量生産・消費社会化しつつある現代、廃棄物は人々の生活を脅かす大きなリスクとなっています。

廃棄物問題研究は工学・政策的なものが主流です。しかし、現実に廃棄物と日々向き合う生活者実践の研究はあまりなされていません。

そこで、私は、都市化と消費社会化が進行中のネパールのカトマンズ盆地を研究対象として設定し、生活者、リサイクル業者、行政などの関係者がどんな実践を行っているか、どうかかわりあっているかを人類学的な調査により明らかにしようと試みています。ネパールでは政府や国際開発援助団体が廃棄物問題に取り組んでいますが、いまだに廃棄物が街路に溢れる事態は頻発しています。その状況下に、生活者の間から自発的な対応が起こっています。また、非公式なリサイクルの仕組みも重要な役割を果たしています。従来の研究においては周辺的なものとして扱われてきたこれらの活動を行政の活動と合わせて調査・研究することにより、廃棄物問題に新たな視点を付与できると考えています。

廃棄物問題は政策、工学、教育、国際的政治など、様々な要因が絡まりあう学際的な問題です。GSSのプログラムはその廃棄物問題を研究テーマとするにあたって、学際的でより広い視野を身につける貴重な機会となっています。また、他の分野の研究者に会い、議論を交わすことは現在の自身の研究にのみならず、グローバル社会において活躍する人材となるために重要であると感じています。将来はGSSプログラムの中で学んだことを活かし、グローバル社会の安全安心に寄与したいと考えています。

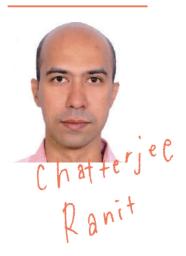
は建築士で災害マネジメントの修士号を持ち、世界を安全な場所にするために尽力してきました。国連開発プログラム(UNDP)でプロジェクトオフィサーとして国や市の政府やコミュニティと協力して働いたり、建築士として民間デザイン会社で働くなど、様々な専門的経験を有しています。 UNDPでの仕事の一環として、災害対応や準備態勢を担当し、現場の現実や安全性配慮の課題に身を晒したことが、GSSの博士課程に入る動機となりました。

災害リスク軽減(DRR)のパラダイムシフトにより、民間セクターが DRR や各国・コミュニティのレジリエンスの重要なステークホルダーとして台頭しており、都市の文脈では一層その傾向が高まっています。ほとんどの国では投資全体の 70 ~ 85%が民間セクターによってなされ、地球規模では年間 80 兆米ドル以上に値する機関投資が行われています。私の研究では、今インドの都市のレジリエンスを強化する上で民間セクター、主に中小企業が果たす役割に着目しています。

政府と中小企業の役割に焦点を当て、インドのムンバイの都市レジリエンスを強化するための災害リスクガバナンスに関する博士課程の研究にとって GSS プログラムは有益なものとなるでしょう。都市レジリエンスのための官・民セクターに関わる学術的研究は限られているため、私にとって両方のセクターと密に相互連携をとって理解を深めていくことが極めて重要です。政府機関および民間機関との幅広いネットワークを持つ GSS プログラムは、多様なバックグラウンドの専門家と災害リスクについて議論し、官・民両セクターと協働する機会を与えてくれます。さらに、GSS のフィールドトレーニングでは様々な国々の研究が可能になり、関連法や政策、ガバナンス課題、グローバルなサプライチェーンマネジメント、重要インフラのリスク削減に関する理解を深める上で有益なものになると思います。 GSS プログラムは、向上心のある災害マネジメントのプロフェッショナルとして、科学的知識とリーダーシップスキルを強化し、災害リスクや社会的脆弱性の因果関係に対する理解を深めてくれることでしょう。

チャタジ・ラニト

地球環境学舎 (L3)



カリナ

工学研究科(L3)



Karlina

文的災害(洪水および水文学的干ばつ)は世界中で発生し、多大な人々に影響を与えます。洪水とは異なり、干ばつによって引き起こされるダメージは非構造的で、同定が困難です。このため、干ばつの問題は研究において洪水ほど注目されにくい状況にあります。しかし、干ばつは今世紀において多大な損害を引き起こしており、将来的により大きな損害を防ぐためにはより多くの配慮が必要です。

私の研究は、インドネシアにおける水文学的干ばつのアセスメントに焦点を当てています。水文学的干ばつと気象学的干ばつを組み合わせ、水文気象学的指標を策定します。こうした指標は、将来的に気候変動災害の影響を理解することを念頭に置いています。本研究は早期警告システムをモニタリングし、干ばつ災害による損害を軽減する上で有効なものとなるでしょう。この研究を通して、干ばつの大きさや頻度、さらに人命への影響のアセスメントが行われます。干ばつの影響には、総合的経済損失および社会的影響が含まれます。干ばつの深刻度、事象期間、全面積、損害および社会的影響を理解することによって、適切な水管理政策が策定され、実践されることになるでしょう。このように本研究は、「自然災害や大災害」「地域的環境変化&社会的不安定」に関わる GSS のテーマや視野に関連します。さらに本研究は、どのように気候変動が災害に影響するかをアセスメントするものでもあり、「地球規模の環境変動」のテーマにも貢献するものとなります。学生達は GSS プログラムを通して多分野横断的な課題を議論する機会を持ちます。私の研究は工学分野のみならず、農学、経済、社会的分野の知識を広く要求するものであるゆえに、こうした機会を通してその研究は一層強化されるものとなるでしょう。

学研究科都市環境工学専攻博士後期課程一年生の王文龍です。この7年間、環境科学及び環境工学の研究に力を入れています。現在はゼブラフィッシュを利用し、新型農薬が人体に与える健康リスクについて研究しています。

「健康リスク」とは、現階段では人体への影響は見られていないある要素が、長時間にわたって人体へマイナスの影響を与えることを指しています。研究では、内分泌かく乱物質、重金属などの大量の化学物質がヒトの健康に影響を与えていることが判明しました。その中で最も顕著なのはネオニコチノイドです。ネオニコチノイドは世界使用量が増加している新型殺虫剤です。ヒトは微量なネオニコチノイドを摂取することによって、短時間では健康への悪影響はないが、長時間では病気を引き起こす可能性があります。この点に関する先行研究が少ないため、ネオニコチノイドのリスク評価が不可欠です。

私の研究では、ゼブラフィッシュを用いてネオニコチノイドの毒性とリスクを評価します。ゼブラフィッシュは「実験操作が簡単」、「神経系が確認しやすい」、「遺伝子がヒトと類似している」などの利点があります。新たなモデル動物として、ゼブラフィッシュは、広く再生医療および毒性評価などの分野で利用されています。本研究は、水の中のオニコチノイドの検測、毒性評価、数理モデルを用いる分析によって、ネオニコチノイドがヒトに与える健康リスクを総合的に評価します。

環境科学は総合的な研究分野で、異なる研究分野との組み合わせが大切です。私はこれまで行った研究が、生物学的手段を用いて環境問題を評価することを重視しています。その他、環境科学は地域の状況に適した方法を取るべきです。ですので、GSS プログラムで、国際的な視野を養うことも不可欠です。GSS プログラムでの3年間のトレーニングは私の研究キャリアの資産になり、自分の国際的な視野、知識の幅、研究の深さ、異文化理解などの面でも大きく成長できると信じています。

王文龍

工学研究科 (L3)





GSS 金沢市・能登半島における合同合宿型ホームルーム (平成 27 年度)

吉川みな子 GSS特定准教授

2 015年9月25日から28日にかけて、石川県金沢市および能登半島においてL1~L4年生合同の合宿型ホームルームが行われました。新たにGSSに参加するL1およびL3編入生およびL2・L4の学生ら18名が学年・所属機関を超えて交流する機会となりました。日本人にとり母国の、外国人留学生にとりホストカントリーである日本における課題について学ぶことも重要な目的のひとつでした。金沢市での洪水発生および能登半島での地震発災(石川県警、總持寺)・復興(蔦屋漆器店)、能登の里山(石川県農林水産部里山振興室、国連大学いしかわ・かなざわオペレーティングユニット、金沢大学能登学舎、手仕事屋)、地域の伝統文化や産業(輪島朝市、工房長屋、白米千枚田、大野製炭工場、珠洲製塩)についての座学・現場訪問を通じて、GSSが取り組む安全安心分野の4つの領域のうち自然災害、食料安全保障、地域環境変動について学際的に理解し知識を深めることに取り組みました。合同合宿型ホームルームの開催は今回で3年目(石川県では2回目)となり、今回からL4の学生が教員と相談しながら訪問先の選定・交渉・計画を担当し、合宿中にもさまざまな場面でリーダーシップを発揮しました。この場をお借りしてご協力いただいた関係者のみなさまに深謝申し上げます。このホームルームにおける学修の成果は本年度中に報告書にまとめる予定です。



編集後記

パリで自爆テロが起こりました。世界の安全と安心が脅かされているように見えますが、実際は特定の地域に押し込められていた脅威が先進国にも及ぶようになったということだと思います。不均衡は不安定さの源泉です。世界の安全と安心を語る上で、私たちはなぜ私たちが先進国でいられるのか、と突きつけられている問いに向き合わなければならないのではないでしょうか。

紛争で傷ついた全ての人に祈りを込めて。

GSS ニュースレター (No.11) 編集担当 工藤晋平

京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム

Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies

News Letter No.11

平成27年1月29日発行

編集 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム ニュースレター編集委員会

発行 京都大学グローバル生存学大学院連携プログラム 京都大学学際融合教育研究推進センター グローバル生存学大学院連携ユニット 京都市左京区吉田中阿達町 1 TEL 075-762-2197

URL http://www.gss.sals.kyoto-u.ac.jp/